

井蛙の見 ウクライナ

新井 宏

私の人生では、「ウクライナ」に何の接点もなく、霧の向こうにぼんやり浮かぶ遠い国の印象であった。しいて言えば、二〇〇三年ルーマニアの奥地マラムレシュの観光地サプンツァから国境のティサ川をはさんで西部ウクライナを遠望したこと、そして本誌一三三号(2014)に「均衡者外交…あるいはポーランドと韓国」を書いて、ロシア、ドイツ、オーストリアの三帝国によりポーランドが三分割された時、運命を共にしたウクライナのことを書いたことぐらいであろうか。

しかし、丁寧に探すとコサックとかモンゴルとかオデッサとか饑饉とか美人とか色々と思ひ浮かぶ。この際、それらのキイワードに少しお化粧しておくのも満更ではないだろう。書き終われば、ウクライナについて、ある程度一貫した知見を得ることができるかも知れない。

それからもうひとつ、同人の永畑俊三氏（永田俊一氏）

から頂戴した著書『遺志ありて・信託の本懐』(2022)には一九一七年のロシア革命の頃や一九三四年のウクライナ饑饉について、示唆に富む記述が多くある。最後の項で触れたいと思う。

一 ウクライナ・国名

ウクライナの語源はスラブ語で、国境地帯、辺境の地という普通名詞だという。しかしドン・コサックとかウクライナ・コサックと言う言葉があるところを見ると、ウクライナも固有名詞としても使われていたらしい。十二世紀後半の『キーウ年代記』にウクライナという表記があるが、キーウより西のペレヤースラウ公国のことを意味していたようで、固有名詞であったかどうかは定かではない。

ウクライナ・コサックと言えば、何か古風な騎馬民族

のイメージを思い浮かべるが、その起源は意外に新しく十五世紀頃で、しかもウクライナの東南部「荒野」というステップ地帯が発祥の地だという。ステンカ・ラージンやショーロフの『静かなるドン』で有名なドン・コサックは十六世紀になってからロシアのドン河周辺に移住したグループだという。

その頃、黒海の北岸にはオスマン帝国に隷属するクリム・ハン国という「タタール」の国があったが、彼らが住む地から見て更に北側の地をウクライナ・コサックと呼んでいた。そのことでウクライナを限定した地域を意味する固有名詞とも考えられるが、ある時はキーウより西の地域を意味し、またある地域では辺境や国境地帯を意味し、「両義性」を持つて自由自在に使われていた可能性がある。

だからウクライナが国家の名称になったのは一九一七年のロシア革命後に、中東部のウクライナ人民共和国と西部の西ウクライナ人民共和国が宣言された時だと思う。この頃、ウクライナ全体の地域を包括する適当な固有名詞がなかったたので、いわばどの地域にも使える普通名詞の「ウクライナ」を使っただけであらう。

歴史的に見ると、九世紀後半から、モンゴル侵略により滅ぼされる十三世紀半ばまで、東スラブ人の居住地（図1参照）、すなわち今のベラルーシ、ウクライナ、ロシアを版図とする統一国家、キーウ大公国（図1、一三

三万平方キロ）が存在していた。面積で言えば、ドイツ、フランス、スペインを合わせた一四二万平方キロに匹敵するほどの大国であったが、ヨーロッパの表記では、大公は国王以下の位であり、ルクセンブルク大公のイメージで誤解され勝ちである。それは、キーウ大公国内に多数の公家や大公家が存在し、その中の有力者が歴代のキーウ大公に就く「大公権」による緩やかな統治形態



図1 キーウ大公国の版図(12世紀)

だったからであろう。

この地域の歴史を語る時、かならず出てくるのが「ルーシ」という言葉である。

「ルーシ」とはバイキング（ノルマン）を意味し九世紀頃から東スラブ人の居住地に次々と植民地を築いていた。最初は現ロシアのサントペテルブルクの南一五〇キロのノヴゴロド・ルーシ、更に三〇〇キロ南下して現ベラルーシのボロツク・ルーシ、また六〇〇キロ南下して現ウクライナに最大のキーウ・ルーシなどを築いたのである。

いわばバイキングの植民地を意味する名称であるが東スラブ人達はこれを嫌ってはいない。むしろ、「ルーシ」の発音が転化した「ロシア」やベラルーシ、キーウ・ルーシなどの地名のように現代まで維持されている。

事実、キーウを「ルーシの諸都市の母」として、他の都市や集落に優越していると考え、ロシアとウクライナの間ではキーウ・ルーシの正当な後継者争いさえ生じている。それはあたかも中国が朝鮮半島から古朝鮮、高句麗、渤海の歴史を奪い取り自国の歴史に練り入れようとしている「東北行程」の様相と似ている。

それにしてもバイキング（ノルマン）はすごかった。フランスのノルマンディ公、英国のノルマン王朝、シチリア、南イタリアのノルマン政権など各地に次々と植民地を築くのである。

バイキングと言えば略奪を業とするイメージが強いが、多くは交易に従事していたのであり、ノヴゴロド・ルーシやキーウ・ルーシなどはバルト海から黒海を経て東ローマ帝国やイスラム帝国へと出るルート確保のための存在であった。その頃、バイキング国家（ノールウェイ、スウェーデン、デンマーク）の人口は全部合わせても百万人にすぎなかった。人口わずか十万人の通商国家ベネチアが各地に植民地を築き通商路を確保したのと同様、バイキングも各地に植民地を築いていたのである。

しかし十三世紀に入り、モンゴルのジョチ・ウルス後継者バトゥが八万の軍勢を率いてキーウ大公国に侵入すると、大公国側もほぼ同程度の戦力を有していたが、多数の公国による協治形態のため、各個撃破され一二四〇年にはキーウ大公国も消滅してしまった。そしてバトゥはポーランドやハンガリーへと侵略を続けた。

西欧にとって幸運だったのは、モンゴル第二代皇帝オゴデイが亡くなり、バトゥに帰還命令が出されヨーロッパ侵攻が終わったことである。しかし東欧はその後二百五十年間、ジョチ・ウルスのキプチャク汗国による支配「タタールの軛」のもとにあった。

十五世紀中頃になるとポーランド・リトアニア同君連合がタンネンベルクの戦いでドイツ騎士団を破った勢いで、東方のジョチ・ウルスを駆逐し、ロシア側の一部を除きキーウ大公国の版図を回復し、モンゴルに替わって

キーウ・ルーシの支配者となった。タンネンベルクの戦いは中世ヨーロッパ最大級の戦闘と言われているが、ドイツ騎士団二万人、ポーランド二万人、リトアニア一万人程度であった。中世ヨーロッパの大会戦はその程度だったということなのである。

ちなみに、タンネンベルクの戦いの七十年ほど前の湊川の戦いも矢作川の戦いも京方二万名弱、足利方三万五千名で両軍の兵力としては同程度であるが、関ヶ原の戦いは両軍は十万名の規模である。もともと、当時のポーランドの人口四百万人に対し日本の人口は千七百万人であった。

現リトアニアはバルト三国の最南、面積七万平方キロ、人口二百八十万の小国である。おそらく十五世紀もそうであつたろう。それが、ポーランドと共に戦ったとは言え、ジョチ・ウルスを駆逐してキーウ・ルーシを手に入れたのである。

その一方で、当初からジョチ・ウルスに臣従していたモスクワ大公国も一四八〇年には事実上ジョチ・ウルスから自由となった。

ところで、タンネンベルクの戦いはもう一つある。第一次世界大戦が勃発した一九一四年のドイツ帝国とロシア帝国の間に起きた最初の大戦である。この時はドイツ十五万人、ロシア四十二万人でドイツが大勝した。

さて、同君連合はその後一五六九年のルブリン合同に

よってポーランド主導のポーランド・リトアニア共和国(九九万平方キロ)に発展しヨーロッパの最強国となる。リトアニア共和国(大公国)は現ベラルーシ部分に限定されたが、ポーランド共和国(王国)は、黒海沿いのクリム・ハン国を除く、ウクライナ・コサック部分まで含めて支配することになった。例えば一六八三年のオスマン帝国十六万人の軍勢による第二次ウィーン包囲では、ポーランド国王ヤン三世が三万の軍勢を率いて救援に駆けつけ、ウィーンに到着するやいなや、精鋭三千騎を率いてオスマン軍陣営の中央突破を敢行、決定的な勝利を得てオスマン軍を敗走させている。

しかし、ポーランド・リトアニア共和国は、国王が世襲ではなく、神聖ローマ帝国の選帝侯と同じく、貴族が国王を選ぶ制度であつたので、お互いに牽制しあい、外国系の王家からの干渉を招くことが多かった。

この頃、ウクライナ・コサックが叛乱を起こして独立を試みる。しかし内乱状態となり、ロシアの保護下に入る道を選んだ。もともとコサックはポーランド・リトアニア共和国の臣下でありながら、国王の支配を受けず自治を許された集団で、傭兵としても活躍していた。

このことが原因で一六五四〜六七七年のロシア・ポーランド戦争が起こり、ロシアが勝利してウクライナを東西に縦断して流れるドニエプル河の東側を獲得した。図2参照のこと。そしてロシア帝国が崩壊するまで二百五十

年間一貫して支配する。
更にロシアの女帝エカチェリーナ二世は一七六二年に即位するやポーランドに対する影響力を行使して、翌々年には親露派の貴族で元愛人のスタニスワフを国王に送

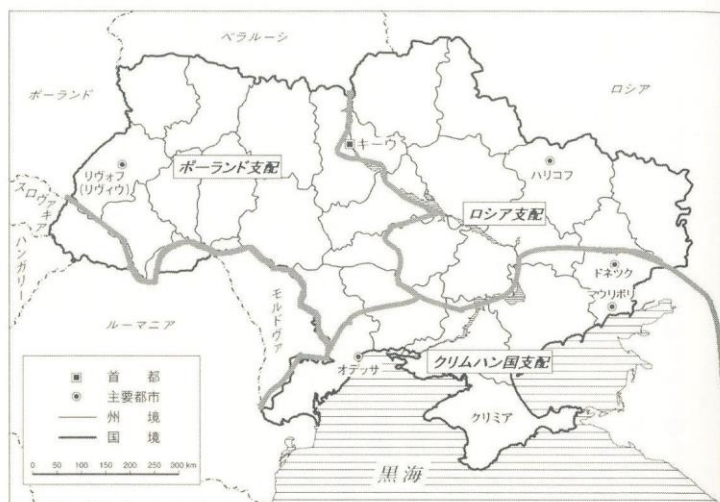


図2 1667年ロシア・ポーランド戦争後のロシア支配地

り込む。また、南下してはオスマン帝国との二度にわたる戦争に勝利して、一七八三年ウクライナの一部やクリム・ハン国を併合し、バルカン半島進出の基礎を築いた。このロシアの進出に危機感を抱いたのが、ハプスブルク家やフランスである。ヨーロッパで緊張が高まった。そこに登場したのが、プロイセン王国のフリードリヒ二世である。戦略家であった彼は、ロシアとハプスブルグの対立を利用して、中に割り込み、ロシア、ドイツ（プロイセン王国）、オーストリア（ハプスブルグ家）の三強によって、ポーランド・リトアニア共和国を最終的に三分割し、一七九五年に消滅させてしまう。ロシアはポーランドを除くベラルーシ、ウクライナの地を獲得した。

前述したように、ウクライナが初めて国名として宣言されたのは、革命でロシア帝国が消滅した一九一七年である。この年、東のウクライナ人民共和国は独立を宣言したが、十月革命で成立したボリシェヴィキ（赤軍）と対立して劣勢に陥った。そのため一九一八年になるとドイツ・オーストリア軍の支援を得て、ボリシェヴィキを一挙に追い出し、クリム半島に至る広大な領土を手にした。

しかしその年の十一月ドイツ帝国が降伏すると赤軍が息を吹き返す。そして、ウクライナ人民共和国、ソビエト赤軍、ロシア帝政派の白軍、白軍を支援するフランス軍、イギリス軍、ポーランド軍、アナキスト軍などが入

り乱れる内戦状態になったが、一九二一年になってソビエト（赤軍）の勝利で内戦が終息する。そしてウクライナ社会主義共和国が成立し、一九二二年には、ロシア、ベラルーシ、ザカフカース共和国とともにソビエト連邦を結成した。

一九一九年のバリ講和会議で、ウクライナ側が主張した領域をみると、ウクライナ・コサックの領域やクリム半島に加え、アゾフ海の南東側のロシア領まで張り出している。

混乱の最中に、一六六七年のロシア・ポーランド戦争でロシアが獲得し、以降二百五十年間も支配してきたドニエプル河の東側をウクライナ領に繰り入れたのである。当然ロシア側が認めるはずのない提案であったが、その後、ウクライナ人民共和国がウクライナ社会主義共和国と名前を変えてソ連邦に編入されたので黙認されたのであろう。

だからドニエプル河の東側は、いまでもウクライナ語よりロシア語が優勢で、選挙では親ロシア側を支持している。

このような経過を見ると、本来ならウクライナはドニエプル河の西側の領域で満足し、ドニエプル河の東側を含まない方が良かったかと思う。そうであれば国名をベラルーシと同じようにキーウ・ルーシとでもしたはずである。

地政学的に見て、中国やロシア等の内陸巨大国家は、過去の歴史で支配したことのある周辺地はもとより、朝貢国さえも自国に編入しようとする本能がある。今、その動きがロシアや中国で進行している。韓国も台湾も危ない。

二一 ウクライナ・戦艦

無声映画の傑作とされる「戦艦ボチョムキン」を知るのは、映画通か全学連の活動家である。私は後者である。しかし映画は見えない。

一九〇五年五月二十七日から二十八日にかけて行われた日本海海戦でロシアのバルチック艦隊は戦艦八隻、巡洋艦級十二隻等の全てを失い壊滅した。旅順港を母港としていた太平洋艦隊も、ロシア側の記録では、前年八月の黄海海戦以降は、戦艦七隻、巡洋艦九隻等、全てが交戦能力を失って、旅順港に係留されていただけだったという。

そうだとすれば、十六万人もの死傷者を出した陸軍による旅順港攻撃はなんだったのだろうか。今更、そんなことを大きな声で言えないのであろうが、バルチック艦隊がリバウ港を出港したのがその年の十月、ロシア太平洋艦隊が八月までに、交戦能力を喪失してしまったことを知って慌てて送り出したと見る方が歴史的には判りやすい。

そして、ロシアはわずか一年で全艦隊の三分の二以上を失しない、残ったのは黒海艦隊のみとなっていた。

その黒海艦隊では、日本海海戦のちょうど一ヶ月後の六月二十七日、「戦艦ポチョムキン」の叛乱」が起きた。艦は予定より二年ほど遅れ前月に竣工したばかりで、乗員は七三一名を数え、うち二十六名が士官で、砲術訓練のためセヴァストポリ港を出港したところであった。

叛乱突発の原因は、昼食に腐った肉が使われていることに不満を申し立てた水兵に対し艦の副長が懲罰を加えようとしたことにあった。それに対し、水兵らはライフル銃を取り、士官らを武装解除し、艦長と上級士官のほか、憎まれ士官が水兵によって射殺された。そして午後には革命を宣言しオデッサに向かっている。

実は、この反乱事件の前から蜂起の計画が進んでいたのであるが、映画で有名な「オデッサの階段」の虐殺事件は虚構だという。

激怒したニコライ二世は、残りの黒海艦隊に叛乱艦の撃沈まで命令していたが、黒海艦隊の中にも叛乱に同調する動きがあり、双方事態收拾に手間取った。最終的に「ポチョムキン」はルーマニアで投降する。

戦艦ポチョムキンはロシア最新鋭艦で、全長百十三メートル、排水量二二九〇〇トン、日本海海戦の旗艦「三笠」の百三十一メートル、一五二〇〇トンを小型にした性能をもっていた。

ところで、今年四月十三日、ロシア黒海艦隊の旗艦「モスクワ」がウクライナ製の地对艦ミサイル「ネプチューン」を二発受け沈没した。「モスクワ」は全長百八十六メートルと長いが排水量は一四九〇トンで「ポチョムキン」と同規模、同じミコラーイウ造船所で造られている。現在ロシアが所有する戦艦のなかでは首都の「モスクワ」を名乗り、戦艦大和にも匹敵する重要艦だと日本の新聞は報道しているが、核兵器でも搭載していたのだろうか。

旗艦ともあろうものが、そう易々と沈没するのがふしぎである。英国・アルゼンチン間のフォークランド戦争の時も、英国の二百六十名乗船の駆逐艦「シェフィールド」がフランス製エグゾセ AM39 空対艦ミサイル一発で沈没した。しかも弾頭は不発だったが大火災が生じたためと言う。

奇妙な偶然であろうが、日露戦争の旅順港戦でロシア太平洋艦隊の旗艦二三〇〇〇トンの「ペトロバヴロスク」も同じ四月十三日に機雷に触れて沈没し、マカロフ中将が戦死している。戦艦は本格的な海戦には強いが、小型漁船に衝突しただけでも戦力を喪失することがあると言う。今後の武器開発は安上がりのドローンに、安上がりなミサイルを載せて突っ込むような方向に進むような気がする。

ところで「戦艦ポチョムキン」や旗艦「モスクワ」を

作ったのはムイコラーイウ黒海造船所であるが、同造船所では中国の空母「遼寧」の元となる「ヴァリヤーグ」も造っていた。しかしソ連邦の崩壊で資金が枯渇、ウクライナに移管し、四十億ドルで売るつもりであったが買い手がつかず、中国がわずか二千万ドルのスクラップ価格で購入し、空母「遼寧」として完成させた。しかし欠陥「空母」との風評がある。中国もいやな気分ではいるのではなからうか。

「ポチヨムキン」の名称は、女帝エカチエリーナ二世の愛人の「ポチヨムキン・タヴリーチエスキー公爵」に因む。軍人、政治家として、一七七三年に発生した大規模な農民の反乱「プガチョフの乱」の鎮圧や一七八三年のクリム・ハン国の併合で功をあげ、クリム地域の県知事となり、オデッサに住み、セヴァストポリ要塞を築き、黒海艦隊を設立している。モスクワ大学で学び、特待生に選ばれ、宮廷から声がかかり近衛騎兵連隊で勤務していた。外見も人柄も良く、女性にもてたという。

前項でも述べたが、女帝は一七六四年にも元愛人のスタニスワフ二世をポーランド最後の国王に送り込んでいる。知られているだけでも十二人の愛人を持ち「王冠を被った娼婦」とまで呼ばれたが、歴代十四人のロシア皇帝中、初代ピョートル一世大帝と共に大帝と称され、実績をあげている。まして、その誕生の経過を知るとそのスケールに驚く。

エカチエリーナ二世はロシア人ではなく、ドイツの小貴族の娘でゾフィーと言った。二代前の女帝エリザベータはクーデターで即位したが未婚、血統を維持するためドイツ育ちの甥を養子とし、更に血縁関係のあるゾフィーを娶えた。甥はピョートル三世となり即位したが、知的障害があったのか外交面で失政を続け、即位半年後には皇后エカチエリーナを支持する近衛部隊がクーデターを起こし廃位され十日後には殺害されている。

エカチエリーナ二世は知的好奇心の強い勉強家だったようで、母国のドイツ語に加え二歳からフランス語を学び、ロシア語にも熟達し、その能力を政治に活かすことを望んでいたであろう、激変する外交関係で手腕を発揮する。

治世時の功績としては、第六次、第七次の対オスマントルコ戦（露土戦争）でオスマン帝国から黒海周辺を奪い、ポーランド分割でベラルーシとウクライナを獲得し領土を拡張、その中でロシアの近代化を推進、エルミターージュ宮に膨大な美術品を収集したことなどが語られている。

日本との関係では、一七八二年、江戸に向かう伊勢の回船船長、大黒屋光太夫らが嵐のためアリユーション列島に漂着、帰国を願うため八年後にエカチエリーナ二世にペテルブルクで謁見している。ロシア側にも日本との通商に関心があり、遣日使節アダム・ラクスマンに伴わ

れ、漂流から約十年を経て根室に帰国した。

もう三十年ほど前になるが、桂川甫周が大黒屋光太夫から聞き取った記録『北槎聞略』のことについて「史遊会」の南雲純さんから伺った記憶がある。探してみたが見当たらなかった。

三 ウクライナ・飢饉

『まんじ』に「狩谷極齋讃歌」を連載していた二〇〇九年頃、狩谷家が弘前藩の米問屋であったことから天明の大飢饉のことを調べたことがある。

東北地方は一七七〇年代から冷害等により農作物の収穫が激減しており、農村は疲弊していた。こうした中、一七八三年には岩木山と浅間山が噴火し、火山噴出物が陽光を遮ったことで、近世最大の冷害が生じた。特に弘前藩では一冬で八万人を超える餓死者を出したという。

それは藩の杜撰な新政策が失敗し、その穴埋めのために年貢を増徴し、農民の種米さえも強制買上して江戸への廻米とし、京阪の商人への借財を返済したことに大きな原因があった。

折から田沼意次の時代、米相場は大阪商人の手にあり、窮乏した各藩は収穫前の年貢ばかりか、翌年、翌々年の分まで売り上げるので、不作だからと言って廻米を減らすことが出来ず、飢饉による被害は農家にしわ寄せされた。その上、商人は米価高騰をにらんで買い占めに走る。

天明の飢饉では米価が一石銀五十匁から百匁に暴騰している。

このような状況は、弘前藩のみならず盛岡藩、八戸藩、仙台藩でも同様であったが、上杉鷹山の米沢藩、松平定信の白河藩では死者をひとりも出さなかった。

やはり飢饉は天災というより人災なのだと納得し、世界の飢饉の歴史も覗いてみた。その時に調べたのは十九世紀のアイランドのジャガイモ饑饉と二十世紀のウクライナのホロドモールだったと思う。いずれも典型的な人災であった。

この項を書きながらもう一度二十世紀の大飢饉について当たって見た。そしてびっくりした。中国毛沢東の大躍進政策の失敗で生じた大飢饉では千五百万人から五千万人が死亡したというのである。世界で最も多く人を殺害したのは、ヒットラーでもスターリンでもなく、毛沢東だと書かれているのを見るが、それがこのことだったのか。

大躍進政策とは、毛沢東の指導の下で、一九五八年から六一年までの間に施行された農業と工業の大増産政策であるが、現実を無視した増産手法、特に四害駆除運動で蝗害を招き大飢饉を生じたのだという。四害とは鼠・蠅・蚊・雀のことであるが、この内の雀撲滅運動は徹底していて、絶滅寸前まで追い込んでしまった。そのため、天敵のいなくなった蝗や虫が大発生し農作物を喰い荒ら

して大凶作を生じたと言う。周章で、ソ連から雀を二十六万羽輸入したのもう手遅れであった。餓死者の中には、この大躍進政策を批判したために粛清された数も含まれているだろうが、いくら人口の多い中国とは言え異常な人災であった。

さて、一九三二―三三年にかけてウクライナ等で発生した大飢饉はホロドモールと言われている。ホロドは飢え、モルは絶滅や抹殺を意味する合成語で、ソビエトの政策に抵抗したウクライナの農民に対するソビエト国家による攻撃の集大成で、飢餓ジェノサイド、スターリン飢饉などとも呼ばれている。餓死者数は諸説あって、三百万人から数百万人とか人口の二割とか言われているが、南京事件の犠牲者数をめぐって、日中間で桁違いの認識があるのと同様に、ロシア・ウクライナ間でも認識に大差があるという。かねてより「欧州のパンかご」と称されていたが、今や世界有数の穀倉地帯である。それが大飢饉に陥ったとはどういうことなのか。

ウクライナの二〇二一年の小麦生産量は三千二百萬トンで、そのうち四分の三の二千四百萬トンを輸出している。主な輸出先はインドネシア、エジプト、パキスタン、バングラデシュ、モロッコで、世界七位の輸出国である。トウモロコシの輸出国でもありその生産量四千万トンのうち大部分の三千四百萬トンを中国、スペイン、オランダ、エジプト、イランなどに輸出している。穀物生産量

としては合計六千五百万トン、主要な生産地は南東部で北西部は少ない。

地球上では一人当たり平均穀物を三百八十キロほど消費しているので、ウクライナは一億五千万人分ほどの食料を供給していることになる。

それではホロドモールが起きた頃はどうだったろうか。ホロドモールに関するウィキペディアの解説を見ると、次のような記載がある。

- ・一九一九年一人当たり消費量を百三十キロとし、余剰の八十二萬トンの徴発を命じた。
- ・一九二七年のウクライナの農村人口は二四一〇万人であった。

- ・一九二八年の穀物不足は二一六萬トンで「危機」というほどではなかった。

- ・一九二九年には穀物三億ブード、一九三〇年には四億六千四百萬ブードを徴発した。

- ・一九三一年の穀物収穫量は四億三千四百萬ブードと前年より減少した。

- ・一九三二年は一人当たり百十三キロの穀物しか残っていないかった。

- ・一九三三年にはスターリンが再び七百七十萬トンの供出を命じた。

これらの記載で、おおよその状況はわかるが、重量単位のブードに註記がない。私は計量史の専門家なので直

ぐに一六・三八キロと調べる事ができたが、一般の読者には判るまい。三億ブードは四百九十万トン、四億六千四百万ブードは七百六十万トン、四億三千四百万ブードは七百十万吨である。

一九一九年の記述に基づいて一九二七年の農村人口を適用すれば年の収穫量は四百万トンと計算されるが百三十キロの規準はいくら何でも低すぎる。江戸時代の米消費量は一人当たり一石(百五十キロ)とされていたが、小麦は米のようにそのまま炊いて食べるわけには行かない。脱穀し製粉してやっと米なみなので、実際には一人当たり二百キロほど必要であらう。事実一九九八年のロシアやウクライナの消費実績を見ると小麦だけで一人当たり二百四十キロ、その他の穀物を加えれば二百六十キロと百三十キロの倍である。その場合には収穫量は七百万トン計算される。

収穫量については、一九三一年は七百万トン、その前年は七百万トン以上とあったことから見て平年作は九百万トほどであったろうか。その数値なら一九二八年の穀物不足は二百十六万トンで「危機」と言うほどではなかったという表現が理解できる。

一方、徴発量については、一九二九年四百九十万トン、三〇年七百六十万トン、三二年七百七十万トンとなり、全収穫量に近い。三二年には一人当たり百十三キロ(合計二百七十二万トン)しか残って居なかったという記述

と合う。ただし、徴発量は計画であり、その実績はかなり下回っていたであろう。

このような状況で収穫を根こそぎ収奪することで、一九三三―三四年の大飢饉ホロドモールが起きたのである。徴発した穀物は外国に輸出された。革命後間もないソ連にとって第一次五カ年計画、特に銑鉄生産や電力網整備の資金源はどこにもない。計画達成と外国への借金返済にどうしても外貨を必要としていた。そのために、約四百万人、あるいは二百六十万から一千万人とも言われる餓死者・犠牲者を生むことになったのである。

たたし、このような大飢饉のことが、ウクライナではあまり伝えられていなかった模様である。そもそもスターリンは外国に対して饑饉のことはひた隠しにしていた。諸外国にとっては、一九二九年以降の世界大恐慌の嵐が吹き荒れるなか、なぜスターリンが統治するソ連だけが経済成長を順調にとげているのか理解しがたいことであつた。

その謎を解くために単身モスクワを訪れたイギリスのジャーナリスト、ジョーンズは、当局の目をかいくぐりウクライナ行きの汽車に乗り込む。凍てつくウクライナの地は想像を絶する悪夢のような光景だった。

二〇二〇年に日本でも公開された映画『赤い闇……スターリンの冷たい大地』はジョーンズが、その惨状を世界に発信する物語だという。

日本でどれほど知られていたか国会図書館の新聞・雑誌史料に当たってみた。

新聞の記事はまだ詳細に当たっていないが、雑誌・単行本で関連記事は二件だけ、取り寄せて見ると、両者は全く同じ内容。著者は正兼菊太というソ連や中国で活躍したスパイとされている人物で、『思想国防』一卷二号(1935)に「ウクライナの饑饉を見る」と言うタイトルで五来素川(皇化連盟代表、読売新聞主筆、明治大・早稲田大教授)らとの懇談を収録している。

注目すべきなのは「農村にいたるのは大部分年寄りで、若い者はみな都会に逃げてしまっている」と述べていることである。その理由は、いくら収穫しても、一日百グラムのパンをくれるだけで、空腹のために穂一つでも盗めば死刑になるからだと言う。

実は饑饉の一九三二年は八・九月の段階では政府は豊年との見通しを発表していた。それが大凶作となったのは、働ける者がみな逃げてしまい収穫作業が出来なかったからだという。工場勤務の若者を一時動員すれば良いのにと著者は言うが、それが出来ないのが硬直した独裁国家の特徴なのだと思う。

このように、日本においてはロシア関係者しか饑饉のことを知らなかったが、ウクライナにおいても公にホロドモールのことが語られるようになったのは当然独立後のことである。ホロドモールをスターリン饑饉というの

は、単にスターリンの第一次五カ年計画強行を意味するのではなく、生来ウクライナ嫌いであったスターリンがウクライナ民族抹殺を図ったとの理解からだと言う。

四 ウクライナ・美女

一九九〇年代後半、新宿の飲食店街で若いウクライナの女性達が働いていた。たまたまであろうが、こちらが気後れるほど英語が上手い。とにかく美人揃いだ。それ以来、ウクライナは美人の国だと思っている。

事実、ウクライナ美人説は客観的にも定着しているようだ。

オレンジ革命によって、二〇〇五年と二〇〇七年、二回にわたってウクライナの首相を務めたユーリア・ティモシェンコは、当時すでに五十歳に近かったが美人だった。ペレストロイカの波に乗り、不法コピーのビデオレンタル店経営で成功し、ロシアからの天然ガスの輸入業者となり「ガスの王女」と呼ばれ、驚異的な得票を獲得して国会議員に選出され、首相にまで登りつめた。その後も、大統領選に出馬し続けており、二〇一九年には現大統領のウオロディミル・ゼレンスキーに挑戦したが大差で敗れた。美人を武器としていたことは想像に難くない。

クリム半島を一方的に併合したプーチンによってクリム半島の「美しすぎる検事総長」に任命されたナターリ

ア・ボクロンスカヤもいる。彼女はEUとNATO入りを目論むキーウの政権に反対していたが、今回のロシア侵攻にはインスタグラムで「狂気や憎しみを扇動することをやめるよう」に訴えている。その後、消息がないがどうなったか気になる。

東京五輪の空手組手女子五十五キロ級銀メダリストのアンジェリカ・デリユーガ（三十歳？）も、五輪時の美貌の胴著姿でインスタグラムに「惨状」を投稿している。何やら出て来る人、出て来る人が美人なのである。そんなことがあるはずは無いが、私のなかではいまま「ウクライナ美人説」がしっかりと定着している。

それはウクライナ人が最も広汎な混血の民族だからだと思う。そもそもウクライナは民族の行き交う十字路に位置し、北からのゴート族、東からのフン族の侵入に始まり、更にノルマン（バイキング）、バザール族、モンゴル族、タタール族などの侵入を受けている。

混血は美人を生むばかりでなく、身体機能も高められしく、日本でも野球、バスケット、ラゲビー、テニス、相撲などのスポーツ界でも目立っている。

ロシアのウクライナ侵攻の最中に開催された北京の冬期パラリンピックでも、ウクライナは金メダル十個を含み合計二十九個のメダルを獲得している。これは地元中国に次いで二位である。因みに日本は合計七個のメダルで総合九位であった。やはり、永年の混血で身体機能の

すぐれた民族だからと思いたいが、戦乱やチェルノブイエの影響で障害者が多く、そのための施設が整っているからとの解説もあった。そう言えば、五月五日ブラジルで開催されたデフリンピック（聴覚障害者の大会）で日本は卓球女子団体戦で銀メダルとなったが、優勝者はウクライナであった。

いま日本でもウクライナからの避難民の受け入れがはじまっている。少子化を補い、数多くの美人やアスリートを誕生できれば、一石二鳥となるのではなからうか。

五 ウクライナ・貧困

ウクライナの経済や教育事情を大まかに知るため、最も簡単な方法として、国民一人当たりの名目GDPと短大以上への進学率を周辺国やアジアの国と比較して見た。表1に示すが、ウクライナの名目GDPは、東のロシアの三分の一、西のポーランドの五分の一、北のベラルーシの二分の一、南のルーマニアの四分の一で、ヨーロッパ最貧国のモルドバよりも低い。購買力GDPで比較すれば、格差は若干縮まるが、大勢に影響ない。それにもかかわらずウクライナの短大以上への進学率は非常に高い。障害者の施設が整っているということも同じ原因であらうか。

それにしてもソ連崩壊時にはロシアと格差がなかったのに大差が生じてしまったのはなぜだろうか。

ご承知のようにウクライナは、中央部を南北に流れるドニエプル河の東側は親ロシア、西側は親西欧とはつきり分かれている国である。歴代大統領をみても、初代レオニード・クラフチュクは親西欧、二代レオニード・クチャマは親ロシア、三代ヴィクトル・ユシチェンコは親西欧、四代ヴィクトル・ヤヌコーヴィチは親ロシア、五代ペトロ・ポロシェンコは親西欧と、ここまでは規則正しく揺れ動いている。そして現在の六代は親ロシアの順番であるが、二〇一四年のロシアによるクリム半島の武力

表1 GDP(ドル/人)・短大進学率の比較

国名	1992年	2020年		2018年
	名目	名目	購買力	進学率
ウクライナ	427	3,750	13,196	82.7
ロシア	483	10,148	28,170	81.9
ポーランド	2,316	15,718	34,225	67.8
ベラルーシ	1,252	6,516	20,226	87.4
ルーマニア	1,241	12,910	30,571	48.2
ハンガリー	3,733	15,948	33,144	48.5
モルドバ	290	4,378	12,750	39.8
スロバキア	2,572	19,254	33,061	46.6
モンゴル	722	4,202	12,074	65.6
インドネシア	908	4,197	12,220	36.3
フィリピン	947	3,512	8,452	35.5
ベトナム	179	3,616	10,897	28.5

進学率は短大以上(%)

による併合が祟りウォロディミル・ゼレンスキーが勝った。

ウクライナから周辺国をみれば、どの方向を見ても所得水準は三〜五倍と圧倒的に高い。過半の国民がロシア語を話す東側はロシアに近づきたくするのは当然で、ほとんどロシア語を解さない西側がポーランドに近づきたいのは誰でも簡単に判る。

本来ならウクライナ独立の際に旧キエウ大公国の領地のみを対象にすれば良かったのに、ロシアが一六六七年から一貫して支配していたウクライナ・コサックの草原まで取り込んだことが、ここに来て禍となつて戻ってきたのである。

まるで李氏朝鮮の末期のようにあっちに付いたりこっちに付いたりして力が相殺され、それが経済発展を阻害しているのであらう。朝鮮半島のようにはっきり西ウクライナと東ウクライナと分かれていければ、今頃、西ウクライナはポーランドいや韓国並みの経済を謳歌していたかも知れない。あるいは展開次第によっては、今後東と西に休戦ラインが敷かれることになるかも知れない。

地政学の示すところであるが、分断国家は難しい。

六 ウクライナ・信託

永田俊一氏から頂戴した著書『遺志ありて・信託の本

懐」には、本誌発行人三戸岡道夫氏が寄せた帯に次のように書かれている。

佐渡の夕焼けは美しい。あのきらめく空の彼方に
信託があるのだと、信託を求めて、佐渡から東京へ、
そしてアメリカ、ウクライナ、パリへと、信託を拡
め追求する男の、感動の物語である。……………

本書は主人公、祖父俊が明治維新とともに生を受け、
その家族、祖母松子、息子英俊、孫俊継が語り継ぐ内容
であるが、一貫して苗字は伏せられている。読者は著者
の名前から永田俊と理解しながら読むことになる。

祖父俊は親友の松本孝や上田崇とともに「三人たかし」
として佐渡から飛び立つ。面白いのは彼らも実在のモデ
ルのように描かれていることである。

例えば、松本孝の父は、讃岐の人で洪庵の適塾で医学
と鉱山学を学び、維新後藩命でドイツに留学し、鉱山学
で名高いフライブルク大学で学び、工部省の鉱山技師に
なり、明治十四年には工部大学校の教授になったと詳細
な経歴を紹介している。しかし明治期の冶金学者をかな
り知っているはずの私には思い当たる人物がない。

祖父俊は、明治十九年渡米、語学校から神学大学、そ
してコロンビア大学を経てロチェスター大学を卒業、在
米八年で帰国し、銀行に勤め信託銀行の経営に携わった。

コロンビア大学時代にユダヤ人イリヤとウクライナ人
ユーリアの夫妻と知り合い共に信託の道に進む。

戦後、新憲法公布後に俊の息子英俊のもとにイリヤ・
ユーリア夫妻の意を受けたウクライナ信託基金の責任者
が一九三四年パリで交わした信託契約書を持って訪れる。

祖母が経営してきた女学校を何とか再開しようと苦心
していたところで、まさに干天に慈雨であった。超イン
フレ下の円ではなくドル資産で長期間のウクライナ信託
基金の再信託が働き十分すぎるほどの金額であった。

本書には、祖父俊と祖母松子が一九一七年夏ウクライ
ナのオデッサでイリヤ・ユーリア夫妻との若き日のこと
を思いながら、ウクライナの独立運動前後のことをかな
り詳しく記している。精読してみると、にわか勉強でお
化粧しながら書いた私の文章が恥ずかしくなる。

特にオデッサの歴史情景描写が借り物でないことを語
る。イリヤのお膳立てで俊夫妻を迎えてくれた若者ヴァ
ロージャが、ポチヨムキンの階段、左右に続くマロニエ
の並木、ロンドンスカヤホテルに同伴しながら「多くの
尊い血が流されなければ、ウクライナ独立は永遠に来な
いでしょう」という。

オデッサの初代市長はフランスからの亡命貴族リシュ
リユーで、後にフランスの首相になるが、彼のお陰で、
パリに先駆けパリに劣らぬ計画的な都市造りが行われた。
ポチヨムキンの階段の前に広がる黒海は日本の面積を超

えるが、最深部は二千メートルもあるのに水面下二百メートルまで硫化水素層が迫っていて透明度が極端に低く、この国を覆っている気分を表していると言う。

その後、ヴァロージャは信託の薬品等の救援物資を輸送中、マフノが率いる農民軍部隊の拠点の側を通過中に銃撃を受け死亡する。

私はここまでアナキストのマフノのことに全く触れなかった。昔からそうであるがアナキストの思想が理解出来なかったからである。しかし、本書を再読して独立を目指したウクライナ人民共和国が最終的にソ連邦に吸収される時、マフノ軍の拠点の村が赤軍に包囲され二十万人とも言われる人々が虐殺されたと知った。

また一九三四年パリの項も同様で、祖父母の俊と松子は国際赤十字関係の会議出席のため、シベリア鉄道でオデッサを経てパリに行く。パリには外交官の息子英俊がいた。

ウクライナ饑饉の話が中心となるが

「ウクライナで起こっている大飢饉も情報統制で外からは分からず、現地に入ったとしても乗り物だけに閉じ込められオデッサにたどり着く旅では覗きようもなかった」。

大飢饉の情報はバリで知ることになる。

「この悲劇的饑饉については、情報統制で秘匿されたため、その具体像が外の世界からは計り知れなかった」。

「全体主義的な国は、国内の困難の捌け口を外に向け勝ちである」。

「ヴァロージャの不条理な死を悲しみ俊が考えたのは、ウクライナ国民共和国の実現があったとすれば、アメリカがもっと早く参戦し、帝政の崩れたタイミングで連合国が勝利するというシナリオしか無かったのではないか」。

その他にも示唆される表現が多い本書であるが、この辺で終わりとする。

それにしても、実録なのか創話なのか最後までわからなかった。その筆力にも感心している。